

第1章 戦場

樺太からの引き揚げ② 生きる知恵を学んだあの時代

あかまつのぶお
赤松信雄さんのお話から

○にしん御殿 ニシン漁で財を成した網元達が、競って造った木造建築物。

○樺太 表紙裏地図

○モッコ 網状に編んだ縄または藁席の四隅に吊り綱を二本付けたもの。

きょうは、私が九歳だった昭和十四年（一九三九年）から十五歳のころのお話をします。

小樽に行くとき、「にしん御殿」があります。これは戦争前にすくく魚が取れたという証です。樺太も例外ではなくとも魚が取れていましたが、最盛期は過ぎていました。ニシンはものすごい数で海を移動し、大群が通るときは、海面が乳白色になってどこから見ても分かりました。それを漁師は常に注意を払い、大群を見つけると浜辺に待機していた漁船が一斉に魚群を目掛けて走り出しました。そして、帰ってくるときは、すべての船が「大漁」の旗を掲げていました。そして、女の人も男の人も木でつくったモッコに魚を入れ、道路に止めてあるトラックまで運びました。私たち子どもは何をやっていたかというとき、運ぶ途中こぼれた魚を手づかみで拾い、浜辺でたき火をして焼いて食べていました。身がばかっとはがれて、脂が乗って非常においしかったです。

そのころ、一般の家庭の暖房はすべてまきでした。まきを手ごろな太さに割って運ぶのが子どもたちの仕事でした。できるだけ火持ちが長い方がいいので、シラカバなどの固い木を集めていました。固い木ですから子どもにはなかなか割れません。そこで何回かやりながら工夫しました。芯から表面に向かってひびができませんから、そのひびを目掛けておの下ろすと固い木が簡単に割れるのです。子どもでも生活の知恵があつて、これを早く割って遊びにいきいたいといつも考えていました。

そういうふうには、戦争の前にいろいろな生活をした中で、子どもたちは物資に恵まれない環

○空爆 空中爆撃の略。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

○偵察機 偵察を任務とする飛行機。

○灯火管制 夜間、敵機の来襲に備え、減光、遮光消灯をすること。

境にあってもいろいろ工夫をしながら、面白い遊び、あるいはまき一つを割るにしても自分の工夫できれいに割ったという満足感を得ており、ちよつとした遊びよりもいい気持ちになったりしたものです。そういうふうにして不満をもつわけでなく、その都度面白く過ごしてきたことは今になってみると幸せであったという気がします。

戦争がだんだん厳しくなってきた東アジアで空爆があったとか、そろそろ空襲が近付くのではないかというようなことがうわさされ、身を守るために道路や学校のグラウンドの一部を掘って防空壕をつくり、近くに爆弾が落ちた場合に備えていました。私は五人家族でしたので、道路の近くに五人がうずくまれる程度の穴を掘ってしのいでいました。シベリアに近いですから私たちの地域を調べて戦略に使うために偵察機が頻繁に空を飛ぶようになりました。そのため、夜はこうこうとしていたのに灯火管制ということで、空襲があったときにはサイレンがけたたましく鳴って一般の人たちに知らせました。

当時の電気というのは裸電球です。サイレンが鳴ったときには黒い布をかけて暗くしました。みんながそうやるのですから、すぐに暗くなるのです。また、爆撃を受けると爆風でガラスが割れて飛び散ります。それでは危ないので、半紙を細く切って窓に張りました。そうしておけば、ひびが入ったとしても飛び散らないということ、これも生活の知恵だと思えますが、苦しまぎれの対策でした。

高等科になると食料がなくなってきたので、二十キロも



イメージ図

裸電球に黒い布をかける様子

生きる知恵を学んだあの時代

○歩哨 警戒・監視にあたる兵士。

○捕虜 戦争などで敵に捕らえられた人。

○保守 たもちまもること。正常な状態などを維持すること。

離れた農家に行つて作付けや収穫の手伝いをしました。泊まり込みで一週間とか二週間でしたから、当然、勉強などはできませんでした。それが当時の学校の生活でした。

終戦間ぎわになるとソ連兵が鶴城村の近くに來ているとの情報があり、私も駆り出されて重い銃を持たされ、一晚中暗い海で一人で歩哨をさせられたことがあります。そのころから「日本人は地球上から抹殺しなければならぬ。」という敵方の思いがうわさとして飛んできて、ますます危機感を抱きました。そこで、私たちは、家族そろってとにかく山へ逃げることにしました。弟と私は荷物を持って歩いて逃げました。身軽な人は走ったり、馬に乗ったりして逃げましたが、私たちは歩いたので何日もかかり山へ向かいました。道路の下に水を流す土管があり、そこに家族が身を寄せ合つて一晚過ごしたこともあり、そこに家族が抹殺される。「日本人は抹殺される。」といううわさを信じ、逃げ遅れて自殺したという家族もありました。私たちは逃げて遅れている途中、ソ連兵に捕まり、連れ戻されました。そこで男の人たちは捕虜にされ、その中からどう選ばれたか分からないのですが、私を入れて学生五人も捕虜になって、さらに北の方にある塔路というところの観察所に二週間収容されました。

帰つてきて、私は十五歳でしたが、樺太配電株式会社に入りしました。古い人が引き揚げていったので私一人で配電線設備の保守管理や集金などもやり、引き揚げるまでの三年間、ソ連の駐留軍と共同生活したわけです。



イメージ図

暗い海で歩哨する兵隊

○カリンカ ロシアの愛唱歌。

ここでもまた子どもの知恵という話ですが、当時は、弟が一人生まれ六人家族で配給のパンだけではとても足りませんでした。とにかく働いたのですが、それだけではためなので、絵や看板を描いて、ソ連の人たちあげて、そのお礼としてパンをもらって食料の足しにしました。普段からやっていたことが後になって役に立ったと思います。

そういうふうな苦しい生活でしたが、ソ連人も日本人も夜になれば気分のはけ口が必要で、日本人は盆踊り、ソ連人は長い靴を履いてカリンカを踊って憂さをはらしました。

昭和二十三年（一九四八年）九月に幸運にも引き揚げる事が許可されました。幸運と言っても一番最後でした。鵜城から漁船で恵須取に行き、真岡に行つて、洞爺丸という大きな連絡船で八時間かかって日本に帰りました。

戦争が終わつてみて私なりに考えたのは、戦争の原因や政府の状況については、私たちは子どもでもでしたから分かりませんが、とにかく戦争により多くの人たちが大切な生活をがんじがらめに拘束されます。また、略奪とか銃殺、自殺などが本当に簡単に行われました。しかも、先ほどソ連人と三年間一緒に暮らしたと言いましたけれども、はつきり言つてあの人たちの方が私たち日本人よりも惨めな生活をしておりませんでした。戦争は勝つても負けても国民の不幸は避けることができません。したがつて、戦争は絶対に撲滅していかねばならないというのが私の結論です。私が話した中から一つでも頭に入れておいていただければ幸いです。

○略奪 かすめうばうごと。
○銃殺 小銃で撃ち殺すこと。

DATA

平成21年度北区平和事業
聴き取り
・平成21年10月13日
・新陽小学校



赤松信雄(あかまつ・のぶお)さん

・昭和5年(1930年)生まれ
・札幌市北区在住